

【エッセイ部門・奨励賞】

神に愛されて死にたい

鹿児島県立鶴丸高等学校 第2学年 河野 蓮

「神に愛されて死ねたら…」

わたしはそんな死について考えることがある。二度目に読んだ『フランダースの犬』がきっかけだ。

初めて読んだのは小学校四年生の時だった。父と母が『フランダースの犬』について話をしてくれたのを聞いたからだ。

「このシーンには感動したよね」

「うん、泣いたわ」

「僕も…」

この会話が記憶にある。おそらくラストの場面、ネロとパトラッシュが天に召されるシーンを話していたのだろう。

父と母が熱く語り合っていた作品だ。感動できる物語に違いないと思った。『フランダースの犬』を買ってほしいとお願いした。

だが、期待していたような感動は得られなかった。読後の感想は、ただ悲しいだけだった。言葉で説明できない悲しさだった。ネロがかわいそう、それだけだった。子どものころ母に読んでもらった『マッチ売りの少女』に通じるような悲しさしかなかった。

今年の夏の日のことだった。本棚にしまっておいた『フランダースの犬』が目にとまった。何の気まぐれかは分からないが、もう一度読んでみたいと思った。

二度目の『フランダースの犬』を読み終えた感想は……、あれほどネロの死が悲しく思っていたのに、うらやましく思ってしまった。純粋な心を持ったまま天に召されたネロとパトラッシュの死が、悲しみではなく、憧憬となり、わたしの前に現れたのである。

どんな形の死であれ、うらやましいなどと称賛してはならない。しかし不謹慎を承知で言うが、純粋なまま迎えられたネロの死がうらやましく思えてしかたがなかった。

好きだから、それだけの理由で絵を描いたネロ。だが、絵は評価されず、憧れていたルーベンスの絵の前で、力尽きて亡くなる。成功も名声もないその死に対して、「負け犬の末路」と心無い人は言うかもしれない。

だが、そうだろうか。ネロは負け犬だったのだろうか。ネロがコンクールで優勝したら、そして絵描きとして世間に認められたら……。そして絵が好きだからというだけの理由で、描き続けることができなくなる。自分の絵を欲しがるとのために、ネロは描くことになる。時には自分が描きたくない絵も描かなければならなし。それがプロの絵描きだ。

描きたくもない絵を描くことで、富を得る。だが、それは彼の望んだ未来なのだろうか。自分に意に反する絵を描く行為は、ネロにとっては、金と魂の交換にほかならない。絵と金

の交換ではない。魂と交換するのである。一枚、そしてまた一枚と絵が売れていくたびに、ネロの純粋さは失われていくだろう。

画商たちと絵の取引をめぐる、やりあうこともあるだろう。少しでも安く、絵を買い叩こうとする画商に、ネロのプライドはズタズタにされるかもしれない。

絵の売買をめぐる、画商と訴訟沙汰になる可能性も否定できない。大きなお金が動けば、それに比例した欲望が渦巻く。訴訟とは、すなわち裁判所という人間が最も醜い部分をさらけ出す場で、当事者となることを意味するネロの目に、法定はどのように映るだろう。

「こんなはずじゃなかった」

と、力なくつぶやくのではないだろうか。

画家として成功したネロを待ち受けているのは、このような日常であろう。果たして画家としての成功が、幸せをもたらすのだろうか。私にはそうは思えない。いや、そう思いたくないのかもしれない。なぜならそこには純粋だったネロは存在しないからだ。

作者は、小説に登場する人物の人生を思いのままに操れる。ネロの世俗にまみれた絵画の世界に放り込むことも、さらなる試練を与えることも、もちろん自由自在だ。

だが、作者のウィーダはそれをしなかった。汚れのないネロをパトラッシュと一緒に天に連れて行った。ウィーダがネロを本当に愛していたからであろう。もしかしたら神がネロを愛し、ウィーダの持つペンに自らの意思を宿し、あの結末へと導いたのかもしれない。神に愛されたし、その具象された姿が天に上っていく場面に思えてしかたがない。

神に愛されたものが迎える死とは一体どのような感覚なのであろうか。穏やかなのだろうか。快樂なのだろうか。それとも静寂なのであろうか。わたしには想像するしか術はない。だが「神に愛されて死ねたら…」、そう思う自由はある。そういう死を迎えるために、わたしは何をすればいいのだろうか。

生命の終わりとして寿命が尽きるのではなく、ネロのように神に愛され、天に召される死、それがどういうものなのだろうか。

その二つについて、考えていきたい。